

小学校低学年において学級における課題(暴力・教室に入ろうとしない)のある子どもに対し効果的に働く個別支援をサポーターの立場から考える

学籍番号 219202

氏名 岩崎 竜也

主指導教員 岡田 和子

副指導教員 渡邊 創太

1. 研究の背景・目的

児童の授業に対する否定的態度から始まりやすい学級経営が困難になるケースは、昔も今も深刻な教育課題となっている。学級が上手く機能しない状況による影響は不登校やいじめ・学力低下といった子どもの問題はもちろん、教師の精神的・肉体的な負担にもつながるため一刻も早く解決すべき問題である。学校管理下における暴力行為発生件数のデータでは10年前と比べ、小学校では5倍以上に増えており(文部科学省、2019年)、近年では小学校入学直後の児童においても問題行動が見られるといった小一プロブレムも問題視されている。小一プロブレムは制約の少ない幼稚園・保育園と規則の多い小学校の環境の格差や家庭環境の欠落・不足による基本的な生活習慣・自制心の獲得の遅れなどが原因とされている(文部科学省、2010年)。

本研究の実践では他の児童・教員・特別支援サポーターに対する暴言・暴力行為や教室離脱などの問題行動が目立つ二人の児童Aと児童Bを研究の対象とするが、問題行動が止められず困っている子どものため、学級の子どもたちが安心して学校生活を送れるようにするため、さらに担任や学校全体の負担を減らすために、研究を進める。

2. 基本学校実習・発展課題実習の取り組み

基本学校実習では、授業中や当番活動や休み時間などで暴力や暴言、教室離脱などが目立つA児と教室離脱などの問題行動が目立つB児の二人を対象とし、授業中やその他の学校生活での行動についてABC分析を行い、行動の機能の特定を行った。それに基づいて、授業参加を促す学習支援や、当番活動を促す支援を行った。また、A児とB児に関わっている教員に対し、アンケート調査・インタビュー調査を実施し、分析した。

発展課題実習でも基本学校実習と同じく2学年に進級したA児、B児を研究の対象とした。A児については、授業中やその他の学校生活の行動について観察を行ったところ、問題行動を全く起こさなくなり、支援をする必要がほとんどなくなった。そこで本人に1年生の頃と比べここまで落ち着いたのはどうしてなのかを会話の中から聞き取ることとした。B児については、1年生の頃より学習への集中力が増し、教室離脱の回数もかなり減ったが、前年度と同じような形で学習支援や当番活動を促すなどの支援を行った。また、B児への学習支援の際に、タイムサンプリング法を通じた個別の授業参加率と課題従事率の測定を行った。また、特別支援学級担任や担任の先生と連携やコミュニケーションを取り、A児、B児に対する指導や支援について気づいたことを各担任に伝え、それがA児、B児へのより良い支援につながったのかどうかについて確認した。また、A児とB児に関わっている教員に対し、アンケート調査・インタビュー調査を実施し、分析した。

3. 研究のまとめ

本実践研究では、2年近い期間、暴言・暴力や教室離脱などの個別支援を必要とするA児、B児に対し、授業や学校生活の場面での行動観察に基づく支援を行った。具体的に、応用行動分析学に基づいたABC分析を行いながら、行動の機能的アセスメントに基づいた個別支援を行ったこと、A児、B児に関わる教員に対し、アンケート調査とインタビュー調査を実施し、分析したこと、B児に対しタイムサンプリング法を用いた行動観察や個別支援を行ったことである。これらをサポーターの立場でもある実習者が学級担任や特別支援学級担任と連携やコミュニケーションを取り、A児、B児へのより良い支援につなげられるようにした。これらのことから、A児、B児への支援方法が見えてきたので、具体的に実践を進めることができた。A児は、望ましい態度で学校生活を送り、友達とも良い関係性を築けるように成長した。B児は、教室離脱がなくなり、学習に取り組む態度が向上し、プリント学習に取り組める時間も伸びてきた。また、児童に支援をする前後で、特別支援学級担任や学級担任から情報を得て共有し合うことがサポーターの立場として大切であり重要である。